

## 平成 30 年度入学試験問題

### 一般選抜前期日程

# 小 論 文

## 「論述（長文理解）」

### 注 意

1. 指示があるまで、手を触れないこと。
2. 指示に従って、解答用紙に受験番号（算用数字）および氏名をはっきりと記入すること。
3. 解答は、解答用紙の指定された箇所に、横書きで記入すること。
4. 問題冊子は 4 ページ、解答用紙は 1 枚である。もし、問題冊子の落丁、乱丁および解答用紙の汚れなどがあれば、ただちに申し出ること。
5. 問題冊子は持ち帰ること。

## 問題 (150 点)

次の文章を読んで、設問に答えなさい。

大学の教師は教壇から何を説いても許される。たとえその内容が党派的で、一方的であろうとも、なんら責任を問われることはない。それが大学の特権である。「アカデミック・フリーダム」である。多くの教師がそう思っている時、ウェーバーの主張は明らかに異質であった。多くの教師が「教祖」たらんとし、「予言者」たらんとしている時、「講義室を新たな神学校にすべきではない」と主張する彼の論は対照的というほかない。

しかしそれならば、ウェーバーは教室の中では思想とかイデオロギーといったものにはいっさい触れるな、避けて通れ、逃げて通れ、と主張していたのであろうか。「こういうことをいったら批判を招く」、「こういう内容は世間の指弾を受ける」、「さわらぬ神にたたりなし」といった逃避主義を教師に推称していたのであろうか。彼はいう。「大学は学生に対して、さまざまな世界観について教えることはできる。その一つ一つがもっている内容、特徴、その心理的背景にまでたちいって、分析、解明をすることはできる。しかしその中のどれを選ぶかは、学生個々人の責任の問題である。大学の教育は個々の学生が行う選択の一手手前でとどまるべきである。個人が一つの価値を選ぶことが、結果的にどの価値を否定することを意味しているのか、そのことは教えることができても、どれを選ぶべきかという選択は個々人にとっておくべきである。いかなる価値を信ずるかは、すべての個人が人生と格闘して自分で獲得しなければならないものだから」。

さらにウェーバーはこうもいっている。現代は諸々のイデオロギーの闘争の時代である。しかもそれらのイデオロギーがたがいに自分の正統性を主張し、キャンパスの中、社会の中で闘争をくりかえしている。大学の仕事はそのどれかを鼓吹し、宣伝し、学生をそうしたイデオロギーにそめあげることにあるのではない。しかし、もし「本物の」イデオロギーであれば、その底にはかならず一人の人間がいかにしてそのイデオロギーに達したか、それを物語る「知的誠実さ」が秘められているはずだ。大学が伝えなければならないのは、この「知的誠実さ」というものである。大学の教師がしなければならないことは、こうした「本物の」イデオロギーの底に秘められてい

る「知的誠実さ」を伝えることである。

しかし現代のわれわれはウェーバーから既に 60 年、70 年たった時点に立っている。その後いかなることが起きたのか、われわれはあまりにも多く知り過ぎている。ドイツの大学のみならず、いかに多くのキャンパスが政治的扇動、政治的宣伝の場と化したのか、いかに多くの教室が教師の論敵を批判する要員の練兵場と化したのか、あまりにも多くを知り過ぎている。たとえばナチズムがいかなる形でキャンパスを支配し、制圧していったのか、そのことも知り過ぎるほど知っている。山本尤氏が『ナチズムと大学』（中公新書 昭和 60 年）の中で詳細にたどったように、ナチズムははじめから、むきだしの権力という装いのもとに、学園内に進出してきたわけではない。学園内でまず登場した光景は、ナチズムに加担する学生たちの運動であった。しかもその運動も、“非ドイツ的”教授に対する直接行動という形をとったわけではない。そうではなくて、“講義を申し合わせてボイコットするとか、大挙して出席しながら、講義の始まる前の歓迎の足踏みの儀式を行わず、氷のような沈黙で教授を迎え、講義が始まると、三々五々グループで席を立てて出て行くといった嫌がらせ”から始まった。

やがてナチズムは、学生の大学行政への関与を法的に認め、評議会や学部において学生に代表権、発言権を与える。しかしそれをつかのみ、ナチズムの支配がキャンパスの隅々に及んだとみるや、学生の大学行政への参加は破棄され、すべては党中央の指令のもとにおかれるようになる。いったんは学生大衆のエネルギーをあおり、それを利用しておきながら、自分たちの求める体制が成立するとみるやいなや、一転して大衆エネルギーの鎮圧、弾圧にまわるのは、けっしてナチズムだけの戦略ではない。そのことをわれわれはあまりにも知り過ぎている。

どうしてこのようなことが起きたのであろうか。ウェーバーが「教室を政治的調教の場とすべきではない」と主張していた時、その隣りの教室では現にそれが行われていたではないか。しかもそれが「新たなる生」を求め、「自己発見」を求めて大学につめかけた青年にそれなりの解答と指針を与えていたではないか。ウェーバーが「見せものがほしかったら、映画館に行くがよい」といったが、その言葉は文字通り現実のものとなったではないか（ウェーバー著、安藤英治訳『宗教社会学論文集』序言）。

大学での講義に心みたされるものがないことを発見した学生、ゼミナール室で展開される「専門研究」に青春の血をたぎらせる可能性のないことを知った学生は、ウェーバーの「アドバイス」通りに、教室をすて、ゼミナール室をすてて、映画館めがけて殺到したではないか。そして、その映画もまた青年の心をうつ魅力をなくした時、テレビ、ゲームセンター、パチンコ、マージャン、ディスコ、サークル、コンパ、さまざまなイベントにむかって殺到したではないか。

(中略)

青年は自分をかけるべき目標を求める。そうした学生の前では、いくら教師が自分のエネルギーを傾注した専門研究の成果を講義したところで、多くの学生は「ご苦労さまでした」というほかない。あえて自分がまたその後を志すだけの魅力的な生き方とは映らない。大学の教師が専門研究を通じて社会的評価をかちとらなければならないその時代に、学生はそうした“アカデミックな知識”とは別の性格の知識を求めて大学にきている。大学といい、教育といいながら、教える者と学ぶ者とは、まったく異なった価値の中に住んでいる。(中略)

いかなる時代にあっても、変動の社会の中にあって、自分の情念をふり向けるべき目標を与えてくれる教師を学生は求める。なぜナチズムがドイツの学生の心をとらえたのか、なぜあれほど容易にドイツの大学を支配することができたのか。その理由の一つは「価値判断から自由な学問」という学問のありかた、スタイルが、青春の情熱をかけるべき目標を求めて大学にやってきた学生に、答えられるだけの魅力をもっていなかったためであろう。その意味では大学はいつも「政治的調教」を目指す勢力の餌食<sup>えじき</sup>になりやすい危険性をかかえている。しかしながら、教壇をもって特定イデオロギーの扇動、宣伝の場に変え、異なる思想の持主に対する心理的圧迫、いやがらせを扇動する場に変えることは、教育ではない。それは教育の自滅以外の何ものでもない。

【出典】潮木守一『キャンパスの生態誌—大学とは何だろう』(中公新書, 1986年)

\* 出題にあたり、原文の縦書きを横書きにし、漢数字の一部を算用数字に改めた。また小見出しを削除し、原文を一部中略した。

(注) ウェーバー：

マックス・ウェーバー (Max Weber : 1864 年～ 1920 年)。ドイツの社会学者。  
『職業としての学問』『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』など。

#### 設問 1

本文冒頭の「アカデミック・フリーダム」と本文末尾の「価値判断から自由な学問」の意味の違いから、大学教育における「自由」について、またそれぞれの長所と短所についても 300 字以内で説明しなさい。

#### 設問 2

大学教育において筆者が危惧していることは何か、またなぜそれが起こるのかについて説明しなさい。その上で、その危惧の現実化をいかに回避すればよいかについて、自身の考えを 500 字以内で述べなさい。